

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### コウボウムギ (*Carex kobomugi* Ohwi)

楠瀬雄三 (高知大学大学院総合人間自然科学研究科)

marukusu5@hotmail.com



コウボウムギはカヤツリグサ科に属する、常緑で多年生の海浜植物である。高さは約 10 cm で地下茎を発達させる。雌雄異株であり、初夏から秋季に結実する。日本における分布域は北海道東海岸以北を除くと日本中に及ぶため、海浜の緑化植物として広域で使用できる。また、高い海流散布能力を持ち<sup>1)</sup>、海浜における先駆性植物のひとつである<sup>1)</sup>。

なお、海浜植物群落の分布様式や緑化の有用性については、本企画で既に澤田<sup>5)</sup>によって述べられているため本稿では触れないが、海浜の生物群集を支える基盤の一つの事例として、海浜植物群落は裸地で繁殖するシロチドリやコアジサシの幼鳥が捕食者から身を隠す場所となり、これらの鳥類の繁殖に寄与することを付け加えておく。

コウボウムギは不安定帯に群落を形成し、波浪や飛砂によって裸地化した場所へいち早く分布を広げる<sup>2)</sup>。砂の堆積が卓越する場所では垂直上方へ年間 1 m 以上、砂の堆積が少ない場所では水平方向へ年間 2 m 以上、地下茎を伸長させる(ただし、上述の生長量は生育良好な場所での事例<sup>9)</sup>)。これらから、波浪や飛砂による攪乱に強く群落を広げる高い本種は海浜における緑化に適した種といえる。

種子の供給源は既存の個体のほか、海流による漂着である。京都府久美浜の事例<sup>9)</sup>では、種子は 2, 4, 6, 9 月を除く月で漂着が確認され、種子の生存率は 67% と比較的高い。また、永続的シードバンクを形成する<sup>7)</sup>。しかし、適度に湿った深さまで埋もれなければ実生の生存率が低くなる<sup>3)</sup>ため、効率的な緑化には播種後に覆砂と適度な散水が必要である。一方、地下茎による移植の場合、一般的な常緑の多年草と同じく、葉の長さを半分ほどに切り詰めて、1~2 月に移植するのが良いだろう。移植後に種子生産による群落の拡大を期待するのであれば雄株と雌株を移植する必要がある。その場合には、病害虫への耐性を考慮して複数の海浜から株を移植することが望ましいが、当然のことながら、導入元は近傍の海浜にするべきである。

コウボウムギは礫浜では群落を形成しない<sup>4)</sup>。また、筆者のこれまでの観察からは、砂利浜でも生長が悪いように思う。そのため、砂の投入によって人工海浜を造る場合には砂の粒径に注意を要する。粒径の大きな砂の場合には、礫浜でも群落を形成するハマゴウが適しており、澤田の報文<sup>5)</sup>が参考になる。

人工海浜では波浪による侵食で海浜の面積が縮小することがある。コウボウムギは他の海浜植物よりは侵食への耐性が強いものの、過剰な場合には枯死する<sup>9)</sup>ため、波浪への対策として防波堤や潜堤などを講じる必要がある。しかし、過剰に波浪を抑制した場合、コマツヨイグサやメリケンムグラなどの外来植物が繁茂する恐れがある。そのため、健全な海浜生態系の創出には防波堤の高さや潜堤の深さ、これらによる閉鎖性についての事前検討と、施工後のモニタリング結果を反映させた順応的管理が必要である。

#### 引用文献

- 1) Ishizuka, K. (1962) Ecological studies on the vegetation of coastal sand bars II. Succession in vegetation and developmental processes of dunes, The Annual Report of the Gakugei Faculty of the Iwate University, 20 :139-168.
- 2) 岡浩平・吉崎真司・小堀洋美 (2008) 静岡県遠州灘海岸における海浜植生の成帯構造の成立要因, 日本緑化工学会誌, 34 : 57-62.
- 3) 岡浩平・吉崎真司・小堀洋美 (2009) 静岡県遠州灘海岸における海浜植物 5 種の実生の発生と定着, 植生学会誌, 26 : 9-20.
- 4) 中西弘樹 (1984) 日本中南部の礫浜植生の植物社会学的研究, Hikobia, 9 : 137-145.
- 5) 澤田佳宏 (2012) ど・こ・ま・で・き・わ・め・る ハマゴウ (*Vitex rotundifolia* Lf.), 日本緑化工学会誌, 38 : 309.
- 6) 澤田佳宏・津田智 (2005a) 日本の暖温帯に生育する海浜植物 14 種の高流散布の可能性, 植生学会誌, 22 : 53-61.
- 7) 澤田佳宏・津田智 (2005b) 日本の温暖域に生育する海浜植物 14 種の永続的シードバンク形成の可能性, 植生学会誌, 22 : 135-146.
- 8) 土倉亮一・田中徹 (1988) 久美浜における海浜植物群落の二次遷移機構, 京都教育大学紀要, 73 : 17-23.
- 9) 矢野悟道 (1983) 砂丘植物群落の現存量と季節的变化—鳥取砂丘の不安定地帯の場合—, 現代生態学の断面, 沼田真編, 共立出版, pp. 135-142.



写真-1 コウボウムギ群落



写真-2 打ち上げ帯で発芽した実生